

レクリエーション原論を中心として

話題提供者 川村英男(体育学研究者)
 近藤英男(近畿大学)
 浅田隆夫(筑波大学)
 コーディネーター・ 蕪木 隆(電気通信学園)
 報告者

昭和58年、1月29日、上智大学に於て、日本レクリエーション学会第3回研究会が開催された。本研究会は、レクリエーション学の体系化を目指すため、「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究」というタイトルで計6回のシリーズ研究会企画の一貫として行われたものであり、この道の権威である3名の先生……川村英男氏、近藤英男氏、浅田隆夫氏に、レクリエーションを原理的立場から考察していただいた。参考迄に、第1回研究会は東京農業大学に於て、レクリエーション学の体系化を目指してというテーマで自由討議が行われ、第2回は日本体育大学に於て、レクリエーション学の対象と方法を中心としてというテーマで、レクリエーション学の体系化試案が提出されている。

さて、「レクリエーション原論を中心として」というテーマにおいては、まず、「レクリエーション」とは何か、「原論」とは何か、「原理」と「原論」との概念の相異、「レクリエーション原論」とは何か、というように各々の言葉の概念が明確化される必要があるが、本研究会ではその作業に追われるのではなく(時間の都合上)、「レクリエーション原論」を次のような共通理解のもとで各先生に話題を提供していただいた。すなわち、レクリエーション原論はレクリエーションの本質を明らかにすることである。

以下に各先生の話題を要約する。

川村英男氏

レクリエーションは人間の生き方に関係がある。レクリエーションは活動そのものよりも、活動の影響、役割、意味など、いわば機能に重点をおく(Leisure・余暇は時間的概念であり、Play, Sport, 遊び等は活動に関する概念である)。原論とは極て多義的な言葉であるが、その(レクリエーション)の根源を論ずるものである。—人間の生きようとする事、人間の本性

にその根源を求めようとする。さて人間性という言葉の概念に目を向けると、人間の回復ということには、人間性が失われているという発想がある。人間形成というときには、未熟・未発達なものという発想がある。人間性は物体の性質のように固定的なものではない。そこに教育や喪失、崩壊の可能性と危険がある。そこでレクリエーションと人間の構造図式の根源を求めると、そこに生命体としての人間の生命のリズム、生活のリズムが考えられる。自然界のリズムにおいて、生命のリズム、生活のリズムをとらえてみると、人間には次のような生来の生理的・機能的構造をもっていることがわかる。すなわち、活動と休息・睡眠あるいは消費と補充・蓄積(運動と休息・栄養)で、1日のリズムは以下のように考えられる。

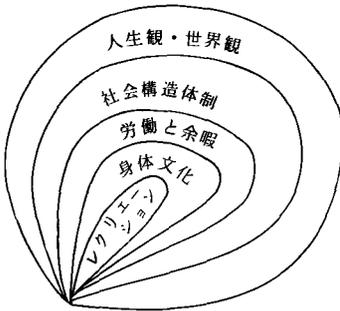
活動 — 労働・仕事(衣食住) …………… 生命維持
 ↳ エネルギーの消費 …………… 昼
 ↳ エネルギーの補充・蓄積 …… 夜

ところが労働・仕事の分化が始まると階層の分化が始まり、それが社会構造の変化となって人間の生活リズムを変化させる。わが国の場合、古代に直接生産に関与しない階層が出現するが、その時代にはまだ余暇という観念は生まれていない。文芸、芸能などは仕事であった。中世には、労働のひまに遊ぶということが出てくるが、そのひまが積極的に明らかに意識されるようになったのは近世以降である。ひまにあそぶことからあそぶためにひまをつくろうと努める。四季に伴う労働と遊び・祭りは生活のリズムをつくり(年中行事)、それにまたエネルギーを費やすことになる。又若い時に苦勞して働き隠居して遊山・芸能を求めるといふ年令的なものははっきりしてくる。幕藩体制はひまとあそびを罪悪視し、勤勞をたつとぶ風習をつくりあげた。このように生活のリズムが変化してくるわけであるが、もう一度生命のリズムという視点から現実をとらえてみると、現実の生活・生存競争(利・理知の世界)を実

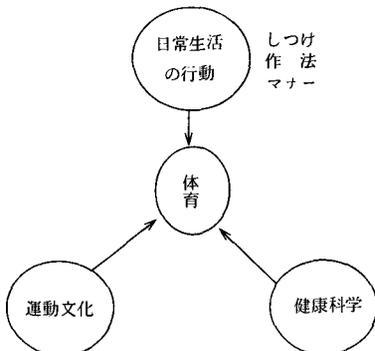
ととらえ、現実からの離脱・自由・解放(夢、情の世界)を虚ととらえる、いわば虚実の戯れとでもいうべき生命のリズムが考えられる。これに合わせてポルトマンの理論的機能と感性的な機能を考えてみると、今日の教育は感性的教育を軽視あるいは無視し、理論的教育に重点を置きすぎていることに問題があるのではないか。感性的教育をもっと大事にし、とりあげていく必要がある。ポルトマンは感性的機能としてのレクリエーション・身体感覚をとりあげていこうとしている。レクリエーションとは何かという根源を求めるには、単に余暇とかLeisureとかいう言葉だけでなく、人間の生命そのものの中に潜んでいるものとしてこれを新たにとらえることが、レクリエーションの根源を求めするための一つのポイントになるであろう。

近藤英男氏

体育の立場からレクリエーションを考えていくと、レクリエーションを次の五重層でとらえることができる。

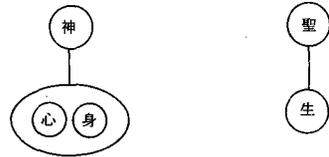


ここでは体育を身体文化論の立場でとらえ、身体文化からレクリエーションを考察していく。身体文化は、人間の生命を守り、育てきたえ、高めるために、身体または身体運動を基盤・媒体として形成された文化の総称であると定義できるが、それを次のような図でおさえることができる。



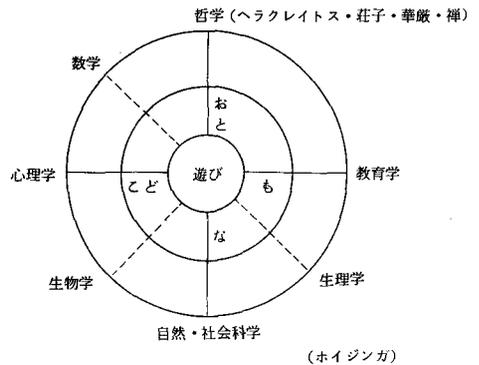
このような考え方は東洋哲学から引き出される。つまり東洋哲学における言葉の中から見出される。東洋で一番大事な言葉は聖という字であり、次に重要な言葉は神という字である。以下生と心と身の関係について図示する。

生と心と身について



このように人間の生命力(生まれてから死ぬまでの体系)を大事にするために、このような言葉が位置づけられているのである。

さて舞踊文化の展開に目を向けると、〈労働(生活)→遊戯→舞踊文化〉というように展開するが、人間は初めから、労働・遊戯のバランスがとれていた。つまり日本でいう、ハレとケ、そして祭りがあげられる。さらにレクリエーションを考えるには、労働観の変遷—余暇観の変遷をしっかりととらえねばならない。またこれからは遊戯論の座標を次のようにとらえてみた。



このように考えていくと、従来のレクリエーション観は、忙中在閑(忙しい中に暇を見つけて遊ぶ)であるが、考えを閑中在忙に転換する必要があろう。労働と遊戯のバランスが必要で、人間性回復には、閑中在忙の考えに則り、労働・遊戯的人間(ホモ・ファルデンス[※])像をこれから打ち出す必要があるだろう。

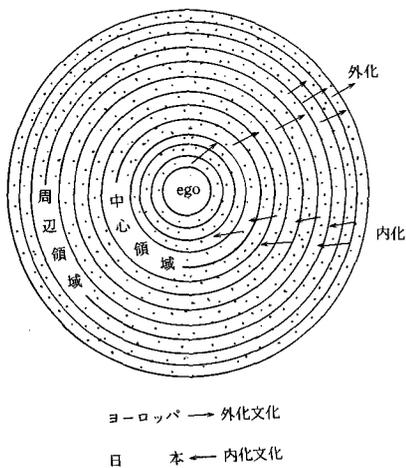
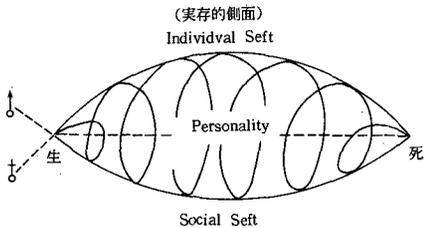
※ ホモ・ルーデンス(ホイジンガ)とホモ・ファーベル(マルクス)をだき合わせた言葉

浅田隆夫氏

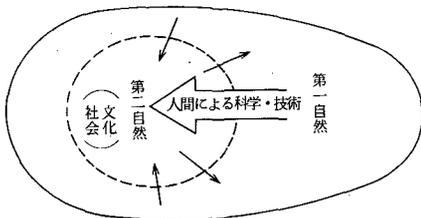
レクリエーションとは何かを念頭に置いて、日本人の心性とレクリエーション様式について考えると、日本人の心性とレクリエーションを、空存(無)を志向する存在平衡運動としてとらえることができるのではないか。

1. 人間とは

1) 人間の一つのとらえ方として、次図のようにとらえることができる。

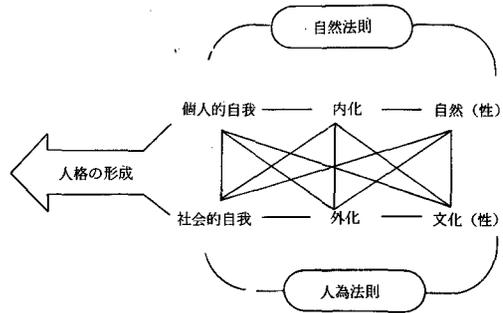


2) 人間・自然・社会の関係は次のようにとらえられる。



3) 人間とは(人格の形成)次のようにとらえられる。

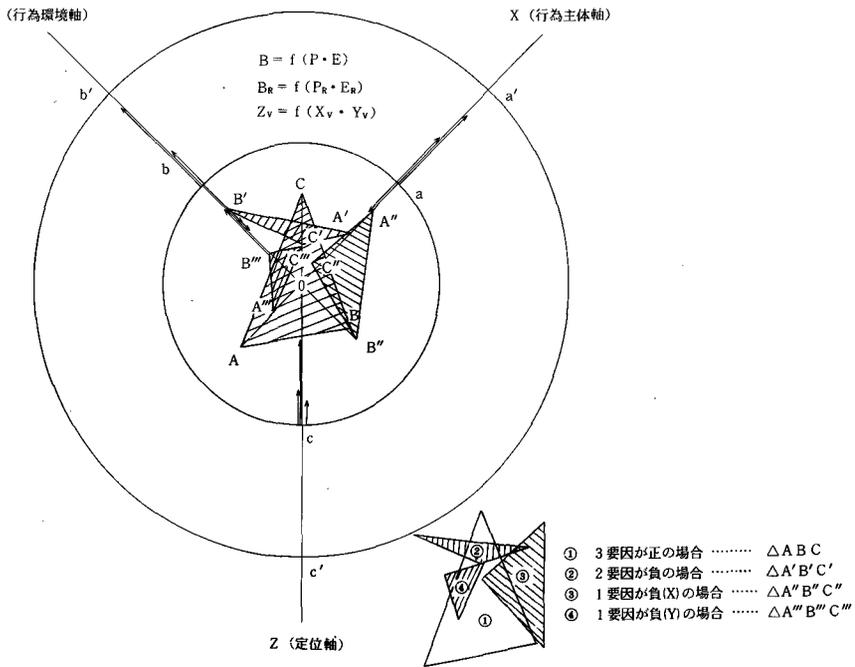
人格の形成モデル



2. 日本人の心性とレクリエーション

- 1) 日本的精神風土
- 2) 日本の文化としてのレクリエーション
- (1) 下村寒太郎の考え方から

日本人の心性は一般性をもった傾向型はあるが、歴史とともに変容する。外来文化の受容のし方に見られるように、日本の文化は文化の雑居性に特色がある(和洋折衷)。しかも日本人の思想の座標軸の欠如(丸山真男氏)といわれながら、東洋・ヨーロッパ・日本の思想が同時に雑然と存在している。日本の思想史に対する事実の精察・論理を確立しなければならない。日本では伝統のないことが日本思想の伝統であるが、そこに日本の文化の特色がみられる。下村・丸山両氏の考えをまとめると、次のように思われる。日本人は一般に志向のし方に、二元的に分化する傾向がある。すなわち体制と個人の区分が明確でなくあいまいである。日本人のおかれている今日の大衆社会に目を向けると、われわれは伝統と規範から自由になった反面、安定した秩序が壊れ、それによる青少年への影響が大きく、彼らの攻撃性・依存性が強くなり、自己愛的志向に陥りやすく、今問題になっている落ちこぼれ、暴力という形で現われてきている。又、現代社会のシンボルがマスコミ等の操作によって、自己愛的傾向を持ってきているが、このような時こそ、連帯感のような自己愛的傾向・socializationが必要になってきている。これが現代の日本人の心性における問題である。このような時こそレクリエーションを次のような無を志向する存在平衡運動としてとらえる必要があるのではないか。



(2) 西田幾太郎の考え方から

ここで西田哲学の身体論から考えてみると、世界はもともと身体的なものである。身体はもともと世界的である。身体は世界が形成する場所である(つくる者をつくられる者につくられる)。現象学の中では人間は世界内存在といわれ、個が出発点となる。身体は可能性として存在し、主体的であり作用そのものである。行為的なものであり、つくられるものへ転換する。この西田哲学から、レクリエーション主観化の方向へ考えることが必要である。生命現象は緊張・解緊との相互作用にある。リズムは主体にあるのであって、それが平衡的に運動するのが良い。

まとめ

川村氏は人間の生活リズムをレクリエーションの原点としてとらえ、近藤氏は、いろいろな立場から、す

なわち体育・労働・遊戯からレクリエーション学を考察した。また浅田氏は日本人の心性とレクリエーションを、無を志向する存在平衡運動としてとらえようとした。3名の先生の発表の後、フロアーとの意見交換・先生どうしの意見交換の要旨を本研究会のまとめとした。

レクリエーションという用語がヨーロッパではとくが、日本的な心性に立ったレクリエーション、日本人の心性をもう少し重視しなければならない。偶然3名とも東洋哲学に話題が集ったが、それと関係あるだろう。体育は生きる力をつけるには、すなわち生きることにかかわらねばならない。従来体育は理論的なものに関わり過ぎ、感性的なものを忘れがちでなかったか。スポーツ・レクリエーションは価値に関わるものである。よってレクリエーションは、人間存在そのものを追求し、価値づけの方向へもっていかなければならない。